

平成 15 年度分野別研究組織 研究成果の概要

近代日本文学における総合書誌作成法の研究

The Study of Bibliography on the Modern Japanese Literature

村田 好哉

(Yoshiya MURATA)

毎年発表されている日本文学関係の研究論文は夥しい数にのぼる。国文学研究資料館においては、1912 年から 2003 年までの約 90 年間に学会誌や大学紀要・同人誌等に発表された同館が所蔵する国文学関係の雑誌論文を中心に、現在のところ約 40 万件を超える文献目録の整備がなされており、それらは「国文学論文目録データベース」として公開されている。同データベースをもとに澤井清が行った調査によると 1971 年から 90 年までの 20 年間において日本近代文学関係の研究論文の総数は 41879 件にも及び、そのうち夏目漱石が 2221 件、森鷗外が 1560 件、島崎藤村が 659 件であることが報告されている。日本近代文学の論文は年間約 2000 本にも及び、近代文学関係で最も論文が多い漱石の場合となると控え目に見積っても毎年ほぼ 100 本見当の論文が発表されていることになる。1991 年以降も程度の差こそあれ漱石を始め、鷗外・芥川龍之介・宮沢賢治といった特定作家への論文の集中は相変わらず続いているし、発表媒体の多様化や学際的研究の隆盛とも相まって日本近代文学関係の情報量は、90 年代以降飛躍的に高まっているのである。

日本近代文学で最も幅広く研究がなされている作家の一人は夏目漱石であるが、ちなみに 2006 年 3 月現在、国文学研究資料館の「国文学論文目録データベース」においてキーワード「漱石」で検索を行うと、7188 件にも及ぶ多くのデータの登録が行われている。この他にも森鷗外 4476 件、宮沢賢治 3948 件、芥川龍之介 3596 件などというように著名な作家については膨大な文献データの蓄積がこれまでになされてきているのである。もっとも論文を執筆する際に一度に数千にも及ぶ文献を利用することは、物理的にも不可能であるし、非効率的なことでもある。このため通常は研究者個々の問題意識にそって作品別あるいはテーマ別にリストの作成、文献の収集を行うことになる。ちなみに同データベースにより夏目漱石について作品別に検索を行った結果「こゝろ」540 件、「三四郎」413 件、「明暗」346 件、「文学論」319 件、「行人」312 件等の文献を確認することができた。研究雑誌のデータベースが充実している国文学研究資料館に対して、単行本に関しては国立国会図書館が充実している。試みに NDL - OPAC(国立国会図書館蔵書検索・申込システム)によりタイトル「漱石」で検索すると和図書 1945 件・その他 72 件、さらにタイトル「SOSEKI」では洋図書 91 件もの資料の登録がなされている。

西洋の衝撃のなかにあつて日本近代を生きた夏目漱石のひとと文学とを巡る研究は学際的な成果を取り入れつつ現在めざましい進展を見せている。夥しい先行論文の洪水のなかに身を置きつつ、いかにして漱石とかかわりながら自己の研究方法を確立していくのか。漱石研究に携わる多くの者が直面する問題であろう。膨大な論文、資料といった情報を効率よく収集し、研究の現状を正確に捉えた上でいかに自己の課題を発見するのか。研究資料を有効に活用しながら課題解明にとつての最適な方法を身につけ、さらには実践する能力を養うことがこれまで以上に求められているのである。